

## 最優秀賞

テーマ3…多様性を認め合う社会をめざして  
「差別の境界線」

神奈川県・相洋高等学校3年 河野愛美

私は障がい者に対する差別について境界線がわからなくなってしまった。私の兄は発達障がいだ。小さい頃からずっと一緒に、暗い道を歩く時はいつも心配してこちらの様子を伺う優しい一面や、好きな曲を奏しそうに歌う可愛らしい一面も私は知っている。私が物心ついた時から兄は自閉症を患っていたので、私にとってはそれが普通のことです。そんな素直な兄が大好きなのだ。しかし、兄のような人が珍しいのか、指をさして笑ったり、勝手に撮影したりなど、面白がる人もいる。何も言い返さない兄の代わりに私が守ろうと思つて生きてきた。そんな経験をたくさんしてきたせいかな、私は障がい者差別について人一倍多感になっていた。

ある日、友達と兄弟の話をしている時に「お兄ちゃん発達障がいだから特別支援学校に通っているんだよ」と言ったら、「言いづらいこと聞いてごめんね」と言われた。私はその言葉に違和感を感じた。私にとって兄が発達障がいであることは、言いづらいことでも隠したいことでもないからだ。

また、可哀想だと言う人もいる。一見優しい言葉にも聞こえるが、実は上から目線で、心の距離を置かれた気がしてしまふ。確かに大変なこととは多く、できないこともたくさんあるけれど、決して不幸ではない。だから、障がいがあることが可哀想なのではない。そう決めつけられてしまふこと、知らずに決めつけてしまふこと自体が悲しいことだと思つ。悪気ない一言が、ある人にとっては固定概念の押しつけで、差別につながってしまうのだ。この頃は友達に悪意がないことをわかっていたので、私は間違つた解釈だと純粹な気持ちで伝えることができた。

しかし、あまりにも無神経な言動には、どついたら良いのかわからな

くなってしまふ。

最近、若者の間で流行っている「障がいじゃん」といういじり合いが私はどうしても許せないのだ。学校でもSNSでも頻繁に聞くようになったこの言葉は、頭がおかしいという意味で使つらしい。つまり障がい者＝頭がおかしいという明らかに侮辱した表現なのである。最初はこんな絶対の間違つている、止めるべきだと思つていた。しかし、みんなが当たり前のように使っているうちに、私が大袈裟なのだろうかと思つてしまつた。きっと障がい者をいじめているつもりも差別するつもりもないのだろう。それなら私の想いがどれだけの人に伝わっているのか、果たして私が行っていることは本当に意味があるのかと考へてしまつたのだ。

前までは「一人でも不快に感じる人がいるならばそれは立派な差別だ」とハッキリ言えたことが、今では自信を持って主張できない。もしかししたら、私は「障がい」という言葉に敏感になりすぎているのだろうか。そもそも「障がい」をテーマに作文を書くことは全く差別につながるかもしれないと言えらうか。次第に私の中の差別の境界線が曖昧になってしまつた。

結局この答えは見つからなかった。人それぞれ考え方が違ふのだから、差別に境界線なんてものは存在しないのだろう。しかし、多くの人が「面白い」という感情だけで行動するのではなく、思いやりのある発言を心がけることが今の私達には必要だと思つた。

そして、自分の気持ちだけは見失わないようにしたい。やはり私は「障がいじゃん」という言葉が嫌いだ。冗談で使つていたとしても、私は認めないし、周りの流行りにも流されたくない。ただ、無理に人に理解してもらおうとするのではなく、自分が正しいと思うことを堂々と伝える自分でありたい。私の気持ちは私が大切にしようと思つた。